

<b>クリ園におけるクリタマバチ寄生蜂の定着調査</b>			
[ 要約 ] クリタマバチに対する天敵調査の結果、マキノ町のクリ園では、天敵である <u>チュウゴクオナガコバチ</u> と <u>クリマモリオナガコバチ</u> が存在する。現地ではチュウゴクオナガコバチがクリタマバチの被害を減少させており、 <u>天敵放飼</u> の必要はない。			
農業試験場 環境部 病虫害管理担当		[ 実施期間 ] 平成13年度～15年度	
[ 部会 ] 農産	[ 分野 ] 環境保全型技術	[ 予算区分 ] 県単	[ 成果分類 ] 指導

[ 背景・ねらい ]

マキノ町のクリ園では、クリタマバチの新梢被害で、年度によりクリの販売量が減少する（図1）。このクリ園では、これまで歴的な防除が繰り返されているために、クリタマバチに対する適期防除を検討する必要がある。その一方で、減農薬の防除体系の組み立ても必要としている。減農薬の防除体系を組み立てるには、園内における天敵の有無を調べる必要がある。そこで園内のクリタマバチ天敵寄生蜂の発生有無を把握し、新しい防除方法の資料とする。

[ 成果の内容・特徴 ]

クリタマバチによる新梢被害が顕在化した2002年1月には、新梢被害を示すゴール着生率は31.3%であったが、2003年2月には24.1%、2003年12月には16.0%と減少傾向がみられる（表1）。

被害が多かった翌年の2002年春期の外来クリタマバチ寄生蜂チュウゴクオナガコバチの100ゴールあたり羽化頭数は28.5頭である。翌年の2003年春期のチュウゴクオナガコバチ羽化頭数は4.4頭と前年の新梢被害と連動して減少している（表2）。

土着のクリタマバチ寄生蜂クリマモリオナガコバチは、2002および2003年春期の100ゴールあたり羽化頭数はチュウゴクオナガコバチより低い（表2）。

以上の結果より、対象とするクリ園（図2）における優占種はチュウゴクオナガコバチである。天敵の羽化頭数は前年度のクリタマバチによる被害率と連動していることから、本クリ園のチュウゴクオナガコバチはクリタマバチによる被害を減少させる密度で存在していると考えられる。

[ 成果の活用面・留意点 ]

本園で天敵であるチュウゴクオナガコバチを確認できたことから、天敵を保護する必要がある。天敵保護は減農薬管理技術の確立につながる。

剪定枝の園外持ちだしは天敵羽化後（5月中旬頃）とし、クリタマバチ羽化期（6月中旬～7月上旬）まで殺虫剤散布を控える必要がある。

[ 具体的データ ]

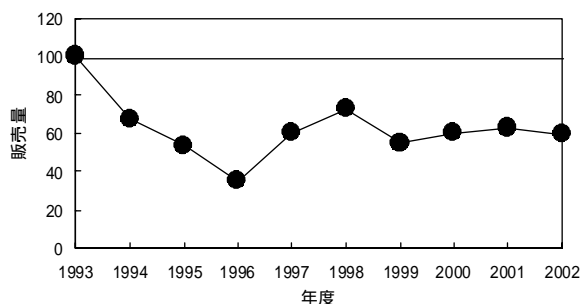


図1 マキノクリ園販売量推移  
(1993年の販売量を100としたときの値)

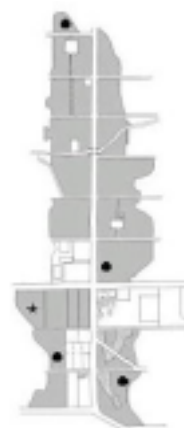


図2 調査地点

★:2001年冬期ゴール調査および2002年春期の寄生蜂幼虫調査地点  
●:2002年1月および12月のゴール調査および2003年春期の寄生蜂幼虫調査地点

表1 クリ園における新梢被害率

年度	総芽数	健全芽	ゴール着生芽	ゴール着生率(%) <sup>*</sup>
2002年1月	720	495	225	31.3
2003年2月	514	390	124	24.1
2003年12月	775	651	124	16.0

\* ゴール着生率 = ゴール着生芽 / 総芽数 × 100

表2 各年度におけるクリタマバチのゴールから羽化したTorymus属の羽化数

寄生蜂の種類	100ゴールあたりの羽化数(頭)	
	2002	2003
Torymus属	38.6	12.9
チュウゴクオナガコバチ	28.5	4.4
クリマモリオナガコバチ	1.3	2.5

Torymus属 =チュウゴクオナガコバチ +クリマモリオナガコバチ

[ その他 ]

・ 研究課題名

大課題名：琵琶湖の水質・生態系保全に配慮した特色ある農林水産技術の開発

中課題名：環境こだわり農業推進のための技術開発

小課題名：生態系を活用した病害虫管理技術の確立

・ 研究担当者名

重久眞至 (H13~H15)、田中豊 (H13~H14)、榎木秀和 (企画情報室; H13~

H15)、田中昇 (湖西普セ; H13~H15)、橋本勇輔 (花き・果樹分場; H14~H15)

・ その他特記事項

要請課題：湖西地域農業改良普及センター (H14)